

空



2008年

SORA 24号

晴夜 (24) | 1

柴田 佐知子

月の鯉月の水輪の芯に居り

夜は色を手放してゐる曼珠沙華

豊年や赤子にうすき眉があり

近道は裏道ばかり花カンナ

枝豆や男はすぐに徒党組む

なだむるに馬を叩けり鱗雲

烏瓜誰が引き寄せても赤し

大空に乾くほかなき鴉の贄

合歡の実や一息で子が話すこと

星月夜

高倉和子

都合良き恋の思ひ出林檎むく

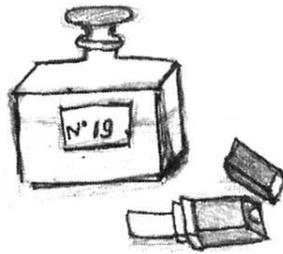
公園の椅子の硬さや秋桜

道草の今も直らず萩は実に

星月夜自づと道を選びをり

竹林に秋の陽射しの落ち着かず

一線を越えて咲きたる曼珠沙華



彼の世への抜け道ありて芒原

破蓮の打ち重なりて暮れにけり

冷まじや土蔵に人形飾られて

電話にてよく笑ふ母豊の秋

体ごと引きて破蓮取りにけり

刈田道ゆつくりと父戻りたる

木の実拾ふ何の迷ひもなく拾ふ

新藁に体ちくちくしてきたり

冬麗や崖打つ波は遊ぶごと

私の通った小学校は丘を越えた耳納山の麓にある。私が住んでいる村は校区の端にあり、学校まで歩いて小一時間くらいしかかった。隣の校区の小学校の方がはるかに近く、どうしてわざわざ遠い学校へ通わなくてはいけないのか不満だった。ほとんど人家が無く田圃が広がっている遠い道の中、丘がひとつの目安だった。丘を越えれば小学校が見えてきて安心するのである。

朝は遅刻しないように急いで行くが帰りは道草三昧だった。野いちごや草花を摘んだり、小川で魚を捕ったり、糞塚の中に入って遊んだりした。そういうえば、学校から一番遠くて危ないからと雨の日などは集団下校をしていた。上級生を先頭に二列に並んで校門を出るのである。ちよつとした遠足気分だったのを思い出す。

今では人通りが無く危険だということの子供たちは遠回りをしているという。子供たちは今でも道草をしているだろうか。

権
の
実

中田みなみ

秋の富士今朝のバターのやゝ固し

朝寒や両掌に挟む犬の貌

逆撫でて鶏頭の種子怒らせり

冬瓜を煮ては遺影を見てしまふ

切株に途切れてゐたる貝割菜

夕暮れの芝生を去れとかなかなかな

玻璃越しの唇何か言ひ暮れ早し

山葵田の水音ひろがる星月夜

高千夏子さん一周忌二句

鬼灯の虫喰網目闘病記

押し花に指紋あるべし蚯蚓鳴く

十月の蜂の出て来し藁の山

幼き頃に

椎の実妙る腹へこませて飢語り

煙茸蹴りて計画たて直す

馬肥えて行先決る婦人会

山霧や鐘に知りたる村の位置

特別な用事もないのに、八十過ぎた頃から、毎日気忙しい感じで過ごしている。残る歳月の少ないということが、いつも底辺にあるからだろう。

身辺の整理をしなければということ。旅行したり、美術館へ行ったり、感動する本にも沢山出会い度いと、うろろうろ焦っている。

私の唯一の贅沢と言えば、洋服布地をかうことだったので、お茶箱に一杯になつてしまった。布地のまま遺しても迷惑だろうと、親しい人の誰彼の体型を思い浮かべては、せつせと縫い、プレゼントし、やっと半分近くなつた。それでも茶箱の蓋を開けては、やれやれと思うのだが、まだ残っているということは、お迎えはずっと先のことだろうと可笑しな納得をしている。

空作品評

柴田佐知子

朝寒や両掌に挟む犬の貌

中田みなみ

おはようと言いなながら両手で愛犬の貌を包まれているのであろうか。そこには一心にご主人様を見上げる犬の目があるのだろう。日常の寸景が楽しく描かれている。みなみさんの愛犬は太一君だったと思うが、かしくかれるように可愛がられて、どうも自分が主と思っているようだとのこと。
寒い朝、飼い主と犬との通い合うぬくもりが伝わってくるほのぼのとした句である。

いまユダの裏切りの章ハンモック

荒井千佐代

ハンモックに身をゆだねて読むのは聖書。敬虔なクリスチャンである千佐代さんならではの世界である。〈ミサオルガン閉づ秋蟬か雨音か〉など静かな日常が、静かに詠まれている。句の姿勢がまことに端正である。

豆柿のひたすらといふ稔り方
怖づ怖づとやがて自在に踊りけり
暗闇にまなこの白き蝮酒
垂直に涙は落ちて空高し

服部 早苗
中条さゆり
吉村 拱護
星原 悦子

これでもかというほどにびっしりと生っている豆柿・踊りはじめと佳境に入っつての変化・焼酎の中の蝮の眼そして涙がぼとりと落ちる様。いずれも正確且つ鮮やかな把握である。

気安うに触らんといて濃竜胆 田岡 千章

八尾市在住の田岡さんは今回初登場。なんともユニークである。座五に置かれた「濃竜胆」と響き合つて「気安うに触らんといて」と声が聞こえてくるような粹な作品。思い切りよく使われた話し言葉が生きている。〈十五夜をてらてら笑ひ陶狸〉〈和の御辞儀洋の握手や男郎花〉など独自の切り口が面白い。

(以下略)

空集

柴田佐知子選

とりあへず枝豆ゆでて待ちにけり
福岡 中条さゆり

怖づ怖づとやがて自在に踊りけり

耳元に鬼灯ならし別れけり

苦瓜の苦さからきしもの足らず

あふれ来る自衛隊員秋夕焼

つづけざま魚の跳びたる良夜かな

おしろいや片減りしたる庭箒

古窯まで花野の人となりにけり

白波に虹ついてくる秋の航

青齒朶の雨一丁目一番地
福岡 吉村撰護

権現の杜に始まる青田風

暗闇にまなこの白き蝮酒

老いてなほ大器晩成葦の花

熱帯夜赤子は膝を立てて泣く



進水の船が極暑にすべり込む
つき抜けて熊本城の秋の空
曼珠沙華柵田を蹴つて昇天す
御強よりピツツアが好きで敬老日
八尾田岡千章

十五夜をてらてら笑ひ陶狸
萩ちりぬジグソーパズルの最後のピース
和の御辞儀洋の握手や男郎花
理想論すなはち正論竹の春
気安うに触らんといて濃竜胆
この先も踏分け径や吾亦紅
無花果は買ふものでなし頬張れり
ふるさとに足踏みオルガン秋立ちぬ
福津野畑小百合
木曾谷の木の宿深く流れ星
鬼灯や日ごと色濃く父母遠し